

ダークエルフ王国征服

女王・イルヴァーIIオルガナ編

三話

三日目の朝だった。

窓から差し込む光が、昨日より白かった。

イルヴァは鎖に繋がれたまま、一人だった。

奥底に、熱が残っていた。三夜分が重なっていた。重なるたびに、濃くなっていた。老王の形の記憶が、老王の熱の記憶が、老王の囁きの記憶が——消えなかった。消えるところか、朝の静寂の中で、より鮮明になっていた。まるで夜の間に、肉体の奥底で何かが熟成されたかのように。

疼きが、昨日より早く始まっていた。

朝の光が差し込んだ瞬間から、すでに疼いていた。意識する前に、疼いていた。老王が来るまでの時間が、昨日より長く感じた。昨日より苦しかった。その苦しさの意味を、イルヴァはわかりたくなかった。しかしわかっていた。

待っていた。

待つという行為が、いつの間にか始まっていた。女王が、待っていた。人間の老いた男を。鎖に繋がれたまま、石造りの部屋の冷たい床の上で、奥底を疼かせながら。

その事実から、目を逸らせなかった。

朝の光が、褐色の肌を斜めに照らしていた。三夜の記憶が刻まれた肌だった。老王の指先の痕跡が、老王の熱の痕跡が、見えない形で残っていた。鎖が、呼吸のたびに微かに鳴った。白銀の髪が、床に広がっていた。赤い瞳が、扉を見ていた。

開かない扉を。

まだ来ない足音を待っていた。

おそらくは本人も認めようとはしないままに。

扉が、開いた。

老王だった。

しかし昨日と違った。手に、革装丁の書物を持っていた。

分厚く、年季の入った書物だった。もう一方の手には、葡萄酒と葉巻だった。

老王がイルヴァを一瞥した。確認の目だった。自分のものを確かめる目だった。

椅子に座る。

近づいてこない。

葡萄酒を卓に置いた。葉巻に火をつけた。書物を開いた。それだけだった。葉巻の煙が、静かに天井へ上っていった。老王は静かに読み始めた。イルヴァを見なかった。

奥底の疼きが、行き場を失った。

「……何をしている」

老王は答えなかった。書物から目を上げなかった。

沈黙が続いた。老王は読み続けた。葡萄酒を時折含みながら、葉巻を燻らせながら、ただ読んでいた。その横顔に、イルヴァへの関心は微塵もなかった。

奥底が、軋んだ。

「なんのつもりだ？」

挑むような、イルヴァのうなり。

それを受けてか、あるいは無関係にか。老王が立ち上がった。

老王は部屋の隅の棚を開け、何かを取り出した。

振動具だった。

老王が近づいてきた。膝をついた。無言だった。イルヴァの長い脚を割り開き、振動具を秘所に押し当てた。固定した。それだけだった。

また、椅子に戻った。

書物を開いた。葡萄酒を一口含んだ。

振動具が、動き始めた。

「——っ」

低い振動が、秘所から全身へ広がった。弱かった。挿入ではなかった。老王の手でもなかった。しかしその弱い振動が、三夜分の記憶を抱えた肉体に、じわじわと、ゆっくりと、染み込んでいった。

「——あ、……………っぐ」

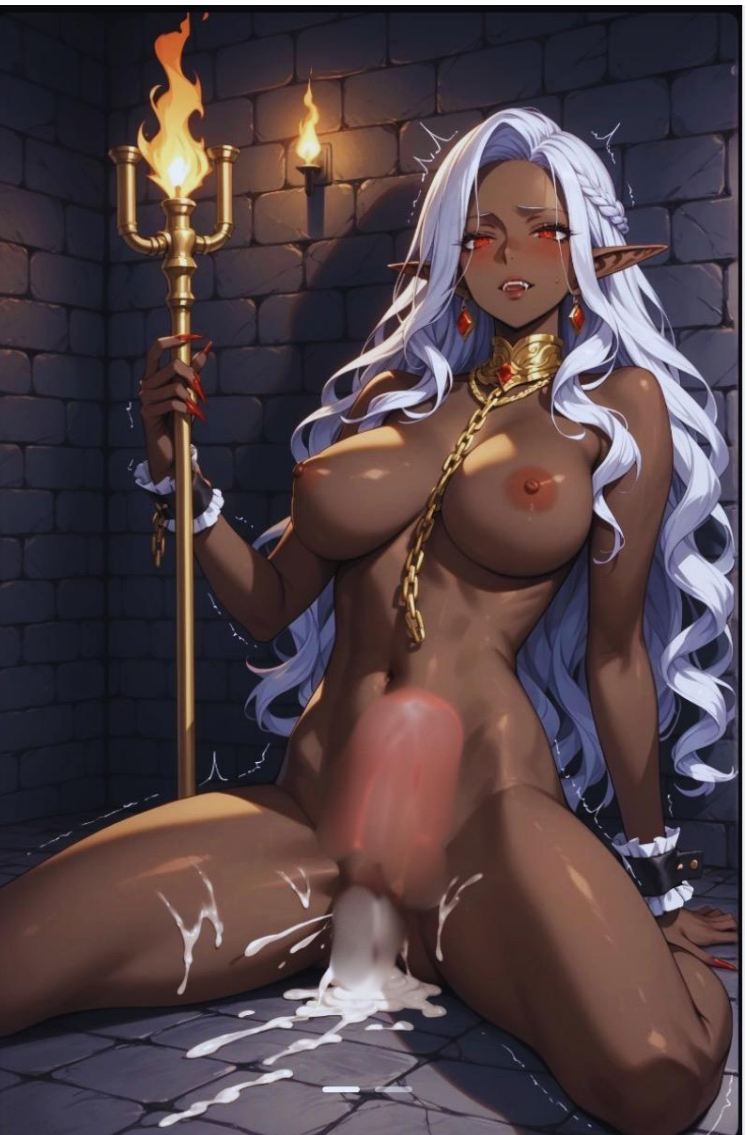
唸りが漏れた。

褐色の肌が、静かに色を変え始めた。首筋から鎖骨へ、胸の上へ、腹へ。情欲の赤みが、深褐色の肌の奥から滲み出

すように広がっていった。ワインが空気に触れて開くように、ゆっくりと、しかし確実に。三夜かけて老王に調律された肉体が、弱い振動だけで、自ら開いていった。

「これもまた、余興だ」

「何、おっ、を……!!」



老王の呟きに噛みついた側から、鎖に繋がれた長身が、振動に合わせて微かにうねった。

胸の頂点が、硬くなっていた。褐色の乳首が、振動の波紋の中で、静かに勃ち上がっていた。意識してではなかった。肉体が、老王の三夜の記憶に従って、自ら応えていた。秘所から、雌の匂いが立ち上り始めていた。甘く、重く、石造りの部屋の冷たい空気に溶けていった。

老王は読み続けていた。

葉巻の煙が上っていた。

「——うう、……っ、……あああ」

唸りが長くなった。振動は弱かった。弱いから、終わりが来なかった。高まっていくが、届かなかった。届きそうで、届かなかった。その焦れたさが、肉体をさらに開かせていった。白銀の髪が、乱れ始めた。褐色の肌が、汗の膜で光り始めた。内腿を、雌の蜜が伝い始めた。

老王が、初めて顔を上げた。

書物を、静かに朗読し始めた。

「——オルガナ王国史、第七章。女王イルヴァ・オルガナの御代」

イルヴァの赤い瞳が、細くなった。

「曰く、彼女は嵐の中に生まれた。前王の血を引きながら、前王を斃した。巨軀と怪力で六百年君臨したオーガの王を、イルヴァは疾風の如き剣技で斬り裂いた。巨を速さで仕留めた者は、大陸の歴史においてイルヴァ・オルガナただ一人である」

「……やめろ」

老王は聞かなかった。

「王の死で乱れた国に、諸侯が群がった。我も我もと王冠を掲げた者、百と余り。イルヴァはその全てを、自ら打ち倒した。一人ずつ。確実に。諸王の王となるまでに要した時間は、わずか七年だった」

「——あ、……っぐ、……うう」

振動が続いた。唸りが続いた。老王の声が、唸りの合間に染み込んできた。自分の歴史だった。自分の勇名だった。血で塗り固めた七年だった。百を超える諸侯を、自らの爪で仕留め続けた七年だった。

その歴史が今——振動具で秘所を責められながら唸り続けるイルヴァの耳に、老王の葡萄酒の肴として、朗読されていた。

奥歯が、噛み合わさった。

老王がページを捲った。葡萄酒を一口含んだ。

「玉座を望む者、女王の首を望む者、ただ最強を試したい者。記録に残る挑戦者の数、二百三十七。イルヴァは一人として、部下に任せなかった。どれほど格下の挑戦者であっても、女王自ら剣を取った。それがオルガナ王国の法であり、イルヴァ・オルガナの矜持だった」

「——あああ、……っ、……ううう」

余裕が、消え始めていた。

朗読を聞く余裕が、確実に消えていった。老王の声が、振動の波の中で、遠くなったり近くなったりした。自分の勇名が読み上げられるたびに、それとは裏腹な今この瞬間の自分の姿が、意識に刺さった。鎖に繋がれ、振動具で秘所を責められ、褐色の肌を情欲で赤く染めながら唸り続ける自分の姿が。

「最後に挑んだ者は、魔族の大公だった。三百年を生きた大公は、開戦前にこう言ったという。女王よ、お前の治世も今日で終わりだ、と。イルヴァは答えなかった。ただ、一合で仕留めた」

「——あああッ、……っぐ、……うううう」

叫びに、近づいていた。

鎖が鳴った。白銀の髪が激しく乱れた。褐色の肌に汗が噴いた。胸の頂点がさらに硬く勃起上がり、振動のたびにかすかに揺れた。秘所から溢れる蜜が、床に滴り始めていた。肉体が、完全に開いていた。

老王は、読み続けていた。

老王がページを捲った。葉巻を、静かに燻らせた。

「北方の氷竜族が国境を侵した時、イルヴァは単騎で出陣し、氷竜の長を打ち倒した。氷竜族はその日から百年、オルガナ王国の国境に近づかなかった」

「——ううう、……っ、……あああ」

「東の魔族連合が大軍を興した時、イルヴァは主将として最前線に立ち、三日三晩戦い続けた。魔族連合の将が十三人、全てイルヴァの手で屠られた。残った兵は、女王の姿を見た瞬間に崩れた」

「——ああああ、……っぐ、……うううう」

限界が、近づいていた。